

転載

## 寺田寅彦から田中館愛橋へのローマ字書簡

—寅彦の美しいローマ字書風を見る—

千葉 明

### はじめに

この度、高知市のオーテピア高知図書館の敷地内に、寺田寅彦博士の銅像が建立された事は、博士を敬愛する者の一人として大変喜ばしく思う。そして銅像の台座に、「Sukina mono Itigo Kôhî Hana Bizin Hutokorode site Utyû-Kenbutu」と良く知られたローマ字歌が刻まれているのも嬉しい。<sup>1)</sup>

寺田寅彦のローマ字表記文は、『寺田寅彦全集』文学篇第10巻<sup>2)</sup>にその殆どが収められ、又その邦字表記文は、その後に発刊された『寺田寅彦全集』第9巻、随筆9、ローマ字の巻<sup>3)</sup>と第10巻、科学論<sup>4)</sup>に収められている。

そして、文学篇第10巻<sup>2)</sup>には、『UMI NO BUTURIGAKU』のように単行本<sup>5)</sup>として古くに刊行されていたものもそのままローマ字で含まれている。

このローマ字表記文については、日本式ローマ字書法の大先達であり寺田寅彦の師でもある田中館愛橋と田丸卓郎の二人の科学者を忘れる事は出来ないので、この二人の著書などについて少し触れておく。

田中館愛橋には『Kuzu no Ne』<sup>6)</sup>(田中館愛橋論文抜集)と『TOKI WA UTURU』<sup>7)</sup>があり、その他雑誌や新聞等に寄稿したローマ字文は極めて多い。一方田丸卓郎の発表文としては多くの学術論文<sup>8)</sup>があるが、研究書としては『RIKIGAKU』I<sup>9)</sup>、II<sup>10)</sup>、『RIKIGAKU NO KYÔKWASYO』<sup>11)</sup>『SINDÔ』<sup>12)</sup>等がある。

私はこの度の寺田寅彦像の台座に寅彦のローマ字歌が筆記体の文字でそのまま刻まれている事を知り、感ずる事があってこの小文を書き始めたので、まずその事から話を進めたい。

それは2001年の事になるが、私は当時所属している『早池峯(はやちね)』という同人誌に、「岩手にゆかりのある文人科学者」シリーズとして、寺田寅彦と田中館愛橋に関する小論を書き、その中で寅彦から田中館に送った手紙文を取り上げ、そこでは寅彦自筆の筆記体のローマ字文をそのままの書体(書風)で紹介した。<sup>13)</sup>

この手紙は岩手県二戸市の二戸市シビックセンターに所蔵されていたもので、手紙は7通(1通

はタイプ文)であったが、その中から2通を紹介した。

そこで今回は他書でも未発表の2通を含め、改めて6通の手紙文を紹介する事にした。

これらの手紙文は印刷文字として、すでに紹介されているものもあるが、私は寅彦の自筆のローマ字文の美しさを寺田寅彦、田中館愛橋を敬愛する人々に見て頂きたいと、改めて二戸市シビックセンターの許しを得てこれを紹介する事にした。

以下、寺田寅彦のローマ字手紙文の「書影」(一部省略あり)とその「邦字表記」「小さな解説」と述べていくが、ローマ字手紙の中で『寺田寅彦全集』第15巻<sup>14)</sup>に印刷文字で引用されているローマ字文は『全集』第15巻、〇～〇頁と付記した。

また田中館愛橋博士、寺田寅彦博士については、敬愛の念を持ちつつそれぞれ田中館、寅彦と書かせて頂いた。

手紙(1) 明治43年7月28日

Bubu. 7pt. 28st.

Acensu!

Friedrichshafen kara no  
Otegami arigataku haiken itasimasta.  
dikawaraga yokenkô de oisogashiku  
yorokobashi koto de arimaseu.

Betuguri no yona mono wa  
mada wakirimasen; tada byasin  
no yakô ga 2-mai maitte iru  
bakaride arimaseu. Sonote ni  
wairimasitara Ose no tori ni  
tori-hakarai masyô. Tadasi,  
amari osoku maitte namawanu  
yô desitara kotira ni oadukari  
itasite okimaseu kara dôka  
sono Otamori ni nezaitô  
gozaimaseu.

Ipamniatal no Oyado wa

Berlin e otuki ni naru made ni  
Suzuki itasite okimasyō. Aso  
Iken wa Hansai de sumasu niwa  
Hokoromote no yoi koto de arimasyō  
Nagasaki sensei wa Raigetsu Ika  
ni Berlin e otuki ni naru sōde  
arimasu.

Watakushi no Kuni no Kyū-  
kansyu Yamanti Kōryaku ga  
Berlin de Byōki ni kakari, sono  
Onimai no tame, Kyūkansu  
wo daihyō site, watakushi wo  
Syūto ga Ito e mairi,  
watakushi no Yado ni tomatte  
arimasu. Yokosugi ga  
tittomo dekinasenkara, watakushi  
ga Tūben, Annasya wo  
tatomete arimasu. Mainiti  
atira kotira to asonde arimasu.

(全3枚の1, 2枚目,  
『全集』第15巻118~120頁)

[邦字表記]

ベルリン7月28日

先生!

フリードリッヒシャーフェンからのお手紙有り  
難く拝見致しました。

相変わらずご健康でお忙しく喜ばしい事であり  
ます。

別刷りのようなものはまだまいりません;ただ,  
写真の原稿が2枚まいっているばかりであります。  
その内にまいりましたら仰せの通りに取り計らい  
ましょう。

但しあまり遅くまいって間に合わぬようでしたら,  
こちらにお預かり致しておきますからどうか  
そのおつものに願いとうございます。

ヨハニスタールのお宿はベルリンにお着きにな  
る迄に詮議致しておきましょう。

あの辺は閑静で、住まうには心持の良いこと  
でありましょう。

長岡先生は来月2日にベルリンにお着きになる  
そうです。

私の国の旧藩主山内公爵がベルリンで病気にか  
かり、そのお見舞いのため、旧藩士を代表して、  
私の舅が当地へ参り、私の宿に泊まっております。

横文字がちっとも出来ませんから、私が通弁、  
案内者をつとめております。毎日あちらこちらと  
遊んでおります。

私も昨日の気象学会で一つしゃべってみました。  
仲々骨が折れましたが、これでつらの皮がいつそ  
う鍛えられました。

いろいろお話がありますが、お目にかかって申  
上げましょう。お着きの日を待っております。

寺田

[小さな解説]

ドイツ留学中<sup>20)</sup>の寅彦が、明治43年7月23  
日にベルリンから田中館に出した手紙である。

田中館も明治43年5月から欧州各国の航空事  
業視察のため欧州に来ていて<sup>15)17)18)</sup>、この手紙は  
フリードリッヒシャーフェンに居る田中館からも  
らった手紙に対する返信である。

なお、フリードリッヒシャーフェンは西ドイツ  
の南西部にあり、かの有名なツェッペリン飛行船  
が製造された工場の所在地である。

またヨハニスタールはベルリンの南東部にあり、  
ヨハニスタール飛行場はドイツで最初の飛行場と  
して明治42年に開港されている。

寅彦は8月2日に長岡先生がベルリンにお着き  
になると書いているが、長岡は明治43年7月、  
ブリュッセル(ベルギー)での万国電気工芸委員  
会、輻射学万国会議やウィーン(オーストリア)  
での万国冷凍会議等に出席するため日本を発つて  
いる。<sup>25)</sup>

また、寅彦から高知の父利正への便り<sup>14)</sup>による  
と、山内公爵はベルリンで入院手術を受けている  
事や、妻夏子の父(舅)阪井重季<sup>22)</sup>が寅彦の宿に  
一緒に泊まっていることが記されている。

手紙(2) 明治43年8月9日

Schönberg, Sept 9th  
Sensei,  
Otagaki wo arigato  
gozaimasita. Iyosyo Ginnan no  
ko e osuimai ni narimasa sōwa.  
Utagatte Flug e otomo setai  
to onoimasu ga, dōmo gibun  
no Karada ga Jiyū ni  
naranai node Komarimasa.  
Mainiti Kase ga Aue de  
Flug wo amari nezomasi  
koto wa dekimasu sen.

Ken Sakugata, Suirui no musu  
wo turete Johannisstal e ikō  
ka to omoimasita ga, Uti no  
kaze no Linden no Hō ga  
sakanari sūdo site, Tisai  
Tōtōyō ga hukiobasarete  
Yukuno wo mimasita kara,  
Miyawaseru koto ni simasita.  
Sono uti ni ukagai masu.

Terada Torakiko

Nimi: Bessi, Suibun no  
Kiriuki omenikakemasu

(全2枚、一部省略、『全集』第15巻未収載)

[邦字表記]

シェーネベルク 8月9日

先生

お葉書を有り難うございました。いよいよグリー  
ューナウの方へお住まいになりましたそうな。何  
って飛行競技会へお供したいと思いますが、どう  
も自分の体が自由にならないので困ります。毎日  
雨や風で飛行競技会もあまり目覚ましいことは出  
来ません。しかし専門家にはかえって風のある  
方が興味がありましよう。<sup>21)</sup>

昨日親類の者を連れてヨハニスタールへ行こう  
かと思いましたが、家の前のリンデンの葉が盛ん  
に振動して小さい蝶々が吹き飛ばされて行くの  
を見ましたから、見合わせる事に致しました。その  
うちに伺います。

寺田寅彦

二伸 別紙、新聞の切り抜きをお目にかけます。

[小さな解説]

明治43年8月9日、寅彦はベルリンの中心地  
区のシェーネベルグにあり、同じベルリンの南東  
地区にあるグリーナウに転居しようとしている  
田中館に送った手紙である。ヨハニスタール飛行  
場で田中館、寅彦兩人とも飛行演習を見ているわ  
けであるが、日本では明治43年12月19日に東  
京の代々木練兵場(ワシントンハイツ)で陸軍の  
徳川好敏大尉がフランス製の複葉機で、初めての  
飛行に成功している。<sup>24)</sup>

手紙(3) 明治43年8月21日

Sensei!

Berlin wo Otaki no Hōi wa  
Ninasan to sūyo ni Teiryōba de  
omati mōimasita ga, Kassyu no  
Tōkoku ga samattaru Sensei no  
Ougato wa ikkō niseru. Itōto  
de tada ataru kōtōra to sarōsu  
site orimasita. Watashi wa sō  
iffen Hōi no Tame ni to  
omotte Wāri no Hōi no Hō  
e sagaimi yaku uti yatto  
omenikakaru koto ga dekimasita.  
Zuibun kōvadoi koto de arimasita.  
Aibara kan no Teiryōba ga  
kiti orare masita, saseba

awo Kawabukuro wo owatari  
itaimasita.

Okasari ni narimasitara  
dōka Kyōsita no katagata ni  
yoroniku otutai no sagaimasu.  
Hondō san kara Bessi  
no Hōgaki ga mairi masita kara  
otodoke itaimasu.

Terada Torakiko

(全2枚、『全集』第15巻123~124頁)

[邦字表記]

先生!

ベルリンをお発ちの日は皆さんと一緒に停車場  
でお待ち申しましたが、発車の時間が迫っても先  
生のお姿は一向に見えず、一同でただあちらこ  
らとうろうろしておりました。

私はもういっぺん念の為にと西の端の方  
へ探しに行くうち、やっとお目にかかる事が出来  
ました。随分きわどい事でありました。相原さん  
も停車場へ来ておられまして、早速あの皮袋をお  
わたし致しました。

お帰りになりましたら、どうか教室の方々に宜  
しくお伝えを願います。

本多さんから別紙の手紙がまいりましたからお  
届け致します。

寺田寅彦



[小さな解説]

明治43年8月21日、寅彦のベルリンからの手紙で、航空関係施設調査のためヨーロッパ各国を廻っていた田中館が、シベリア経由で帰国の途につく日のベルリン駅での見送りの事を書いた手紙である。

手紙(4) 大正6年4月18日

Apr. 18<sup>th</sup>  
 Tamakadate Sensei,  
 Ohayaki wo arigato gozaimasita. Gobusatsu itasimaitte sumimasen. Ikega no Ato wa sidaini motorio tori ni onasari ni naru koto to yorokobasaku zonzimogae.  
 Onnositake no Mitaru-Bô no Bangô wa sassoku sirabete Watanabe, Makano Goryôku ni osirase itasimasyô.  
 Kouoaida no Getuyôbi no Kôkû ni Kuwazi dewa, nakanaka Giron ni Hana ga sakimasite Koto Osimai ga takazu ni sonomama ni natte arimasu. Sikasi, taiseituna Mondai de arimasu kara Yokuyoku iwa kura kangatte Okamba narusmai to zonzimaseu. Kuwazi Koto wa Ome ni kakatte moriagemasyô.  
 Kozo Osuzimi Goryôzô wa iorimasu.  
 Terada T.

(全1枚、『全集』第15巻179~180頁)

[邦字表記]

4月18日

田中館先生

お葉書を有り難うございました。ご無沙汰致しましてすみません。お怪我のあとは次第に元の通りにお治りになることを喜ばしく存じます。お申し付けのメートル棒の番号は早速調べて渡辺、中野、ご両君にお知らせ致します。

この間の月曜日の航空の会議では、なかなか議論に花が咲きまして、とうとうおしまいがつかずにそのままになっております。しかし大切な問題でありますから、よくよく今から考えておかねばなるまいと存じます。詳しい事はお目にかかって申し上げます。

どうぞ大事にご養生を祈ります。

寺田 T.

[小さな解説]

大正6年4月18日、寅彦が本郷向ヶ丘弥生町の自宅から神奈川県湯河原温泉で湯治中の田中館に書いた葉書文で、細かいローマ字が美しい。

田中館は大学に自転車で通勤していたが、大正5年12月に学内の坂道で転倒して大腿骨を骨折し、東大病院に入院した。<sup>19)</sup>

翌春まで歩行困難であったが、4月になり湯河原温泉の富士屋旅館に湯治に出かけている。一方、寅彦はこの4月18日の日記<sup>26)</sup>によると「午後発熱、帰宅後就床、八度位にて止む、濱口姉上来る」と書いており、体調が良くない事を記している。

手紙(5) 大正6年4月26日

Tamakadate Sensei,  
 Otoyami arigotaku haikuitasimaitte. Taijutsu no Uta no onosiroku haiken itaei masite, sugami Tamaru Sensei no hô e omawari itasite oimaitte.  
 Kisei wa kurete no Tsyigaeri ga arimasite. Watakushi wa Sinsai yobô Tsyôbakwai de Monbujiyo e mairimasite, Sokoro Nikai no Kuda kara  
 (全1枚の前半、『全集』第15巻180~181頁)

[邦字表記]

大正6年4月26日

田中館先生

お手紙有り難く拝見致しました。(タイプライター)の歌は面白く拝見致しまして、すぐに田丸先生の方へお廻ししておきました。

昨日はスミスの“宙返り”がありました。私は震災予防審査会で文部省へ参りまして、ここの二階の窓から遥かに青山の空の離れ技を見物致しました。スミスが足を痛めて益々その技を磨いたように、先生もいよいよ益々学問の為に尽力下さいますように祈っております。

そろそろお帰日も近づいた事と存じます。どうか十分にご養生を祈ります。

寺田 T.

[小さな解説]

大正6年4月26日、手紙(5)と同じく本郷向ヶ丘弥生町の自宅から湯河原温泉の富士屋旅館で湯治中の田中館に送った手紙である。

田中館が湯河原から寅彦に送ったタイプライターの歌とはローマ字短歌で、

山中にタイプライターたたき居れば  
きつつきがあると人は思わん

夜深きにタイプライターたたきなば  
人や目ざめてくいなとすらん

など9首である。<sup>15)16)</sup>そして手直しの上、田丸先生に送って『ローマ字世界』に寄稿するように願いたいと書き添えている。

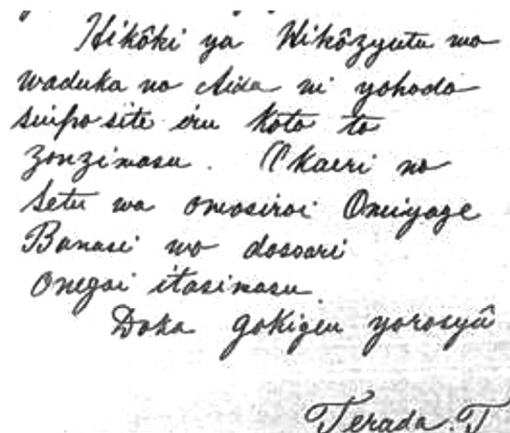
これに対し寅彦は「田中館先生に」<sup>28)</sup>と題して同じローマ字短歌を3首詠んでいる。その中の2首、

朝な夕な<sup>ほそたにがわ</sup>細谷川のせせらぎに  
混じりて君がタイプ打つ音

塵の巷悩みの国をしばし逃れ  
いで湯の里にタイプ打つ君

この日の寅彦の日記<sup>26)</sup>によれば、スミスの宙返り飛行を寅彦は見に行けなかったが、「母上と姉上貞子は見に行く」と書かれている。青山とは当時の青山練兵場である。

手紙(6) 昭和3年9月13日



(全2枚の2枚目後半、『全集』未収載)

〔邦字表記〕

東京 9月13日

先生

もはやご無事にお着きになって、毎日お忙しい事と存じます。どうかお体を大切に願います。

先だって、不幸の節には早速ご親切にお見舞い下されまして有り難う存じます。厚くお礼を申し上げます。

先生のお発ちになるのを少しも存じませんで失礼致しました。

私も9月10日に東京へ帰って参りまして、毎日学校へ出ていますから、はばかりながらご安心を願います。

鴨緑江の盛んな景色の絵はがき、有り難く拝見致しました。

東京も支那問題で大分騒いでいるようであります。毎日号外の声をかぬ日ありません。お留守でもお変わりがないようでありますからご安心でございます。

飛行機や飛行術はわずかの間に余程進歩していることと存じます。お帰りの節は面白いお土産話をどっさりお願い致します。

どうかご機嫌宜しゅう。

寺田T.

〔小さな解説〕

昭和3年9月13日、寅彦は紳子夫人との那須、塩原方面への小旅行から帰って自宅におり、田中館は航空力学研究用務でモスコウに行っている。田中館はモスコウに向う途中、朝鮮の京城を通り、満州との国境を流れる鴨緑江を渡り、シベリア鉄道で9月12日にモスコウに到着している。

田中館はモスコウで、

秋たけてウラルの路のうねり路

目路<sup>めじ</sup>のかぎりをはそり行く見る

(9月14日)

とローマ字短歌を詠んでいる。<sup>15)16)</sup>又、旅行の途中で渡った鴨緑江の絵はがきを寅彦に送っている。

おわりに

寺田寅彦の自著、あるいは寅彦について書かれた著書や資料は多くあるが、そして寅彦の絵も本として見る事が出来るが、寅彦のペン字の跡をそのまま印刷物として見る機会は何もない。私はたまたま二戸市シビックセンター(田中館愛橋記念科学館)に所蔵されている寺田寅彦から師の田中館愛橋に送られた筆記体のローマ字手紙文を見せてもらい、その美しさに感動した。現在は筆記体で英文やローマ字を書くという事はあまり行われていないかも知れないが、私はこの美しい寅彦の文字の流れと、手紙の内容を多くの人に見てもらいたいと思い、二戸シビックセンターの許しを得て再びこれに取り組んだ。

本題の内容を拵げて本稿を書くに当っては、二戸シビックセンター、田中館愛橋会会長・工藤武三氏、二戸市歴史民俗資料館館長・菅原孝平氏、岩手県立図書館に大変お世話になりました。厚くお礼を申し上げます。また、この文の報告に当た

って科学史研究者の四宮義正氏から色々ご教示を頂きました。記してお礼を申し上げます。

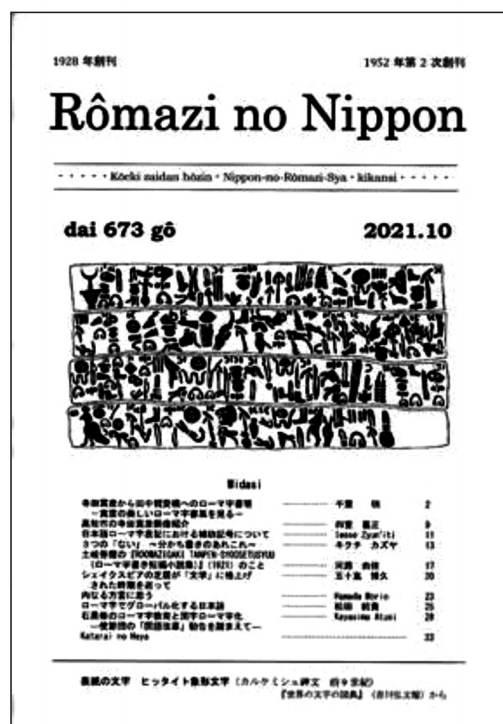
Tiba Akira.

(元岩手県農業試験場長・農学博士)

### 参考文献

- 1)宮 英司『寺田寅彦銅像物語』寺田寅彦記念館友の会 2018.7.24.
- 2)『寺田寅彦全集』文学篇 第10巻 ROOMAZI NO MAKI 岩波書店 1986.5.2. 2刷
- 3)『寺田寅彦全集』第9巻 随筆9 ローマ字の巻 岩波書店 1997.8.6.
- 4)『寺田寅彦全集』第10巻 科学論 岩波書店 1997.9.5.
- 5)Terada Torahiko. 『UMI NO BUTURIGAKU』NIPPON-NO-RÔMAZI-SYA 1913.1.1.
- 6)田中館愛橋『Kuzu no Ne』(田中館愛橋論文抜集)日本のローマ字社 昭和 13.4.15.
- 7)TANAKADATE-AIKITU. 『TOKI WA UTURU』鳳文書林 昭和 23.8.25.
- 8)大森一彦「田丸卓郎論文目録稿」『大森一彦書誌選集』金沢文圃閣 2012.
- 9)TAMARU-TAKURÔ 『RIKIGAKU I』岩波書店 昭和 10.12.10.
- 10)TAMARU-TAKURÔ 『RIKIGAKU II』岩波書店 昭和 12.6.10.
- 11)TAMARU-TAKURÔ 『RIKIGAKU NO KYÔKWASYO』日本のローマ字社 大正 14.3.31.
- 12)Tamaru-Takurô 『SINDÔ』日本のローマ字社 大正 1.12.10.
- 13)千葉明「岩手にゆかりのある文人科学者 寺田寅彦、中谷宇吉郎・治宇二郎兄弟をめぐる人々」(其の一)『早池峯』28号 早池峯の会 平成 14.7.
- 14)『寺田寅彦全集』文学篇 第15巻 書簡集1 岩波書店 1986.10.6. 2刷
- 15)田中館美穂『私の父 田中館愛橋』二戸市 平成 11.9.18.
- 16)田中館愛橋会編『田中館愛橋博士歌集』田中館愛橋会 平成 9.2.1.
- 17)相馬福太郎「ローマ字新聞等で見ると田中館愛橋博士の足跡」『田中館資料第2集』平成 14.11.2.
- 18)中村清二『田中館愛橋先生』中央公論社 昭和 19.10.1. 再版
- 19)小野澄之助「田中館愛橋博士」堀川豊水編『近代日本の科学者』第3巻 人文閣 昭和 17.8.15.
- 20)深尾重光「寺田寅彦博士」堀川豊水編『近代日本の科学者』第4巻 人文閣 昭和 17.9.10.
- 21)矢島祐利『寺田寅彦』岩波書店 昭和 24.10.23.
- 22)山田一郎『寺田寅彦 妻たちの歳月』岩波書店 2006.9.22
- 23)田中館愛橋『航空機講話』富山房 大正 4.11.8.
- 24)木村秀政『飛行機の本』新潮社 1962.2.15.
- 25)板倉聖宣『長岡半太郎』朝日新聞社 昭和 51.4.15.
- 26)『寺田寅彦全集』文学篇 第12巻 日記2 岩波書店 1986.7.6. 2刷
- 27)鴻江洋明編『寺田寅彦「ローマ字の巻」編訳ほか』葦書房 1989.12.5.

(謝辞) 本稿は『Rômazi no Nippon』dai 673 gô (2021n 10 gt 1 nt) 掲載文の転載である。ご快諾いただいた日本のローマ字社理事長・茅島篤様に深く感謝致します。



『Rômazi no Nippon』dai 673 gô 表紙